クルーズ客船寄港の経済効果

事務局長　池田良穂

8 月 22 日付けの日本経済新聞に、「船がやってきた。でも客は来ない。」と題して、国はクルーズ客船誘致に力を入れるが、その経済効果が疑問として、「机の上の計画や「ハコモノ神話」に引きずられれば、目標への道のりはゆがむ」という断じた記事がでた。なお、ここでの目標とは、国としての経済成長に関するものを指している。

この記事は、署名入りの記事で、記者名は池田将氏。同じ苗字なので親近感は覚えたものの清水港での取材を基にしていて、同じ清水港で 8 月にクルーズ船で寄港して聞いた話とのあまりのギャップに驚いた。

私が訪れた清水港では、タクシーの運転手からはクルーズが来てお客が増えていると聞き、温泉施設では 200 人もの乗客が来てくれてありがたいと聞き、港の近くの寿司屋はクルーズの乗客で一杯だった。 しかし、記者は近くの眼鏡屋さんで取材して、「クルーズ船の恩恵?99%ない」と話したと記している。クルーズに来て地元の眼鏡屋さんで眼鏡を誂える人などいるのだろうか。もしかすると、恩恵のないところばかりで取材をしたのではなかろうか。そんな疑問さえわく。また、記事の中では、清水港に寄港したのに隣町のアウトレットにバスで移動して買い物をしたことが、せっかく清水港が予算を使ってクルーズ誘致をしたことのメリットを享受していないことが問題だと指摘している。

寄港する港だけでなく、広域でとらえなくてはクルーズの経済波及効果は見えてこない。だからこそ、国がクルーズの拠点港を選んで国費を投じた整備をしているわけで、日本の国内で消費がされれば、波及効果として全体が潤う。当然、寄港した港にも波及効果はやってくる。

最近、こうしたやや短絡的な視点が多いのが気になる。例えば、ホテルや旅館などの宿泊業にはクルーズは、発着港を除けば、基本的にお金をあまり落とさない。したがってクルーズ誘致にはあまり積極的でないという声が聞こえる。しかし、クルーズ客が落としたお金は、地域のどこかを潤し、その人々は旅行にもでかけて、まわりまわって宿泊業も潤うようになるはず。こうした広い観点が必要なはずだ。

ときどきこうした記事を目にするようになって、やや心配になっている。